
小さな小さな私の習慣

ちい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小さな小さな私の習慣

【Nコード】

N0167D

【作者名】

ちい

【あらすじ】

ほとんどネタバレではないですが、一応コミック59巻からなので読んでない方はお気を付け下さい。事件は関係ないです。学校の帰り道、5人は本屋に寄ります。

（前書き）

哀嬢↓コナンです。

特にラブラブ要素はありませんが、哀ちゃんは少し前向き気味かな
って感じます。

今は学校の帰り道。

突然元太が行った。

「おい、本屋寄って行こうぜ」

「あ、今日サンデー発売日じゃない？」

「そうですね。行きましょう！！コナン君と灰原さんも来ますよね」
すぐに歩美と光彦が同意し、コナンと哀に向かって聞いた。

「ああ」

「ええ、いいわよ」

そういう訳で5人は今本屋に向かっている。

本屋に入ると歩美、光彦、元太はすぐに漫画のコーナーへ走って行った。いつもならコナンと哀も走る事はしなくても3人の後をついて行くのだが…。

コナンは何故かあたりをきよるきよるしている。

そして、哀はというと…。

「全く、しょうがない推理バカさんね」

そう呟いて、クスツと笑って“推理バカさん”の方へ歩いて行った。もともと本屋に入る前までは隣を歩いていた彼。今も2、3m離れているだけ。すぐにコナンのそばへ行くと、すっと手を伸ばして彼の頬に指を押しあてる。

「向こうの棚よ…どーせミステリーでしょ？」

「あ、悪い…」

そう言ってミステリーコーナーへ駆けて行くコナン。

たったこれだけの短い会話が哀を自然と笑顔にする。

クス。1番ばかなのは、きっと私ね。

これだけの事でこんなに嬉しくなるなんて。

しかも、彼の読んでるミステリー小説の発売日を調べて、本屋のコーナーまで確認してるなんて…。

彼にばれたら…どう思われるかしら…？

この、小さな小さな私の習慣。

誰にも言わない、私だけの秘密。

（後書き）

お疲れ様でした！！笑

お読みいただきありがとうございます。

最近忙しくて全然投稿してなくてすみません。もっと上手に小説書きたいなあ。

余裕があれば今年中に哀ちゃんの短編をもっ1話投稿出来るように頑張ります。

それでわ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0167d/>

小さな小さな私の習慣

2010年10月28日04時10分発行